ネギま！ advance

赤石 ナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！advance

【Nコード】

N7646X

【作者名】

赤石 ナイ

【あらすじ】

かつての世界で答えを得た、可能性も見つけた。
進むべき道は見えた。

調整者の新たな戦いが始まる。

prologue (前書き)

本作品には作者による独自解釈が含まれており、原作ファンの方々には不快に感じる点もあるかもしれませんがご了承ください。

また、本作品には

『魔法少女リリカルなのはadvance』
におけるネタばれ要素が含まれていますのでご注意ください。

prologue

「お帰りなさい元さん」

ここは俺の家ではない、しかし世界に俺の居場所は存在しなく、世界の外れにあるこの場所…管理者の世界こそが俺の帰る場所になる。

「ただいま…神さん」

「名前では呼んでくれないんですか？」

記憶は戻った、力も封印が解けた…今の俺は全盛期となんら変わらない姿形、力を持っている。

「…イシユタル、今まで迷惑をかけた」

「それが私と貴方の間での約束ですから、お気になさらず」

彼女は俺に再び封印をかけるのか聞いてくる…しかし、俺はそれを否定で答える。

なぜか？

簡単だよ。

もう俺は迷わないし、目的を見失わない。

彼女達と約束したからな…。

「悩んで、苦しんで、考え抜いて答えを出す。だからさ…咎を背負うさ」

「…わかりました。早速ですが、行つて頂きたい世界があります」

「勿論だ…そのために俺は存在する。…それで制約は？」

「Eランクはなし、Aランクオーバーは2つ、Bランクオーバーは3つ、それ以下は4つです…力を抑えれば、制限もなくなります
が…」

「いや、それでも封印はいい…それで次の世界はどんな世界だ？」

俺の質問に彼女は手を頭にあて、情報を流し込む…。

そこに映し出されたモノは…。

「立派な魔法使い《マギステル・マギ》？ △ンドゥス・マギクス魔法世界？

この世界は魔法が存在するのか…いや、どちらかというと魔術に近いな」

「魔術を行使する貴方としては、魔法とは言いたくないですか？」

「…いや、そこまで傲慢になるつもりは無いさ。世界が違うんだ
概念も違うさ…しかし、マギステル・マギが…」

「どうしました？」

「いやエミヤが知ったら、涙を流して喜ぶだろうな…と思ってな」

「守護者ですか…」

「まあ、別にいいさ…それで、創造できる宝具なんだが決まった」

「…そうですね、ッ待って下さい！」

俺が造り出そうとするところに、彼女からの待ったが入った。どうやら、向こうの世界の管理者から新しく追加の用件が入ったようだ。

曰く、従者も連れて行っていいとのこと…その代わり、制限が厳しくなる。

「従者…？ 英霊を連れて行ってもいいと？」

「はい…そのかわりですが、Aランクオーバー1つ、Bランクオーバー2つ、以下3つです」

「…厳しくないか？」

「…そうですね、しかし」

「まあ、あいつ等の内1人でも連れて行けるなら、仕事はかなり楽か…」

「行動の幅がかなり広がりますしね、それに英霊のもつ宝具はあなたの制限には入りませんし…」

俺は大して長考することも無く、考えをまとめた。

Aランクオーバーは1つのみ…となれば、広域撲滅にも適した存在…となれば。

「エミヤを呼ぶか…」

「彼をですか？ アルトリアさんやメデューサさんでは無くてですか？」

「俺としては彼女達にも会いたいが、仕事に私情は挟まんさ。

制限のある俺としてはアイツの無限の投影は心強い…それにさ」

「？」

「あいつの目から見たその世界の正義の味方というのを知りたいしな」

俺の知る限りの最上級の正義が彼だ。

あまりにも正義であるために、その存在は過激で鮮烈で非情で悲しいものだ。

次の世界のマグステル・マギというものがあいつよりも素晴らしいか見比べたくもある。

「わかりました…それでは彼を呼びます」

俺と彼女の間には眩いまでの光で包まれた。

英霊の座への直接の交渉…。

成功するか？

「失敗しました」

「……」

失敗だった。

「理由を聞こうか」

「根源は今回の件に守護者を用いられたくないようです。あくまで正式な英霊で無いとダメなようです」

「…そうか、ならアルトリアを…いやメデューサを頼む」

「……分かりました」

彼女の視線が痛い。

言っておくが、俺は私情で彼女を選んだわけではないぞ。勿論、彼女に会いたいとは思った…でも私情ではない。

「…たぶん」

「私は気にしませんよ」

「……」

眩いまでの光の中から現れたのは妖艶で美しい紫のロングヘアの彼女だった。

「召喚に応じました…貴方が私のマスターですね、元」

「そつだ、久しぶり…でもないかメデューサ元気か？」

「はい、会いたかったですよ元」

嬉しいことを言ってくれる。

俺と彼女の微笑ましい再会に1人ジト目で見てくる管理者。

「…いいですよ、別に貴方が誰を選ぼうが私には関係ありませんよ」

「……いや、あの」

「関係ないですとも、ですからアルトリアさんに告げ口もしませんよ」

「…っつ」

痛いところ突いてくる。

というか、告げ口は勘弁してくれ…。

「そついえば、座から呼ばれるときに彼女に会いましたよ」

「…え？」

「物凄く怒っているような顔でした」

「……」

うん…。

次に会うときは腹を括ろっ…。

「それでどの宝具を持って行くんですか？」

「ああそうだな…それじゃあ」

彼が創り出したのは、計6つの剣と盾、槍であった

絶世の名剣、熾天覆う七つの円環、ロー・アイアマサルンテイング赤原獵犬、宝具の射出にも耐え
られる洋弓、破戒すべき全ての符、ルールブカをちまっ干将・ほくや莫耶の6つである。

「バランスがいいですね」

「俺としては対魔力として破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグを持っていきたくっただ
がな」

「今回は制限が厳しいですからね…」

「という訳だ。メデューサ…期待しても良いか？」

「勿論です元。私が愛した貴方のためにわが身はあるんですよ？」

ツク…嬉しいことを言ってくれる。

俺がメデューサと良い空気を作っていると…、

「元さん…」

「うん？」

「いつてらっじゃい…」

「「はい？」」

地面が開いて、体は綺麗にフェードアウトしていった。

最後に見たものは、恐ろしいまでに良い笑顔の管理者であった。

主人公設定&サーヴァント設定

名前：神堂シンドウ元ハジメ

肉体年齢：26歳

身長：195cm

体重：78kg

特技：空手、柔術、八極拳、システム、合気道を組み合わせた我流の体術 剣術 槍術 弓術

趣味：読書 歴史、神話の独学 鍛練

魔術回路：メイン120 サブ70

魔眼：流動の魔眼

人間の可能性を信じる事が出来たため、本当の力を取り戻した真の調整者。

調整者とは根源：根源の渦のアカシックレコードに記されているイレギュラーによる破滅の結果を正すものこと。

その力は、管理者群に帰属されており、彼らの要求の下行動する。

かつて、あらゆる魔法にも属さない異端の魔法をもって根源に至った存在を管理者が掬い取り調整の役を授けた。

しかし、その力はガイアやアラヤ、抑止力、英霊といった神秘に比べあまりに脆弱であり人間の域をでることがでない。

戦闘スタイルは剣による白兵戦がメインであり彼が用いる五大元素や様々な魔術はあくまで補助にすぎない。

義手に隠されているナイフ、アンカーや圧倒的な戦術幅、剣、槍、弓、体術を効果的に用いて身体的スペックの勝る英霊とも対等に渡り合うことが出来る。

神堂元が英霊達と同等の戦闘を演じられるのは、彼が生前に養ってきた圧倒的なまでの戦術幅と魔眼の力によるものが大きい。

魔術師の腕は超一流であり、最高の才をもち、彼が唯一の超一流となれる分野でもある。

また、世界から外れたことにより彼には起源は存在せず「」である。

身体スペック

筋力 A 耐久 B 敏捷 B 魔力 A 幸運 C 宝具 C A +

所持スキル一覧

流動の魔眼：あらゆるモノの流れを読むことが出来る魔眼。それは当人によってオン・オフが可能であり、視ようとすれば世界の流れ

：未来視も可能である。

しかし、それには脳に多大な負担がかかり、廃人になる可能性も高い。

これを用いて、彼は対人・対神秘に対する戦闘を優位に進めることが出来る。

創造：彼の魔法であり、第1～6までも属されない異端の魔法。調整者にまで昇華された最大の要因。

創造の名の通り、対象を理解さえすれば対象と全く変わらないレベルのモノを創れる。これによって本来ランクの下がる投影を彼はランクを下げることなく、完全な状態で造りだすことが出来る。

また、元は根源に至ったため魔力さえあれば新たな命もあまつさえ世界すら創りだす事ができる。

心眼（真）：修練・経験の積み重ねによって得られる物。得られた情報と戦闘経験に基づく冷静な状況判断によって活路を見出すことができる。

千里眼：・・・ランク

これは流動の魔眼から派生したものであり、動くものであれば視界に入った瞬間見つけることが出来るという能力。

しかし、動くことがないモノであれば、500mが限界である。

カリスマ：Cランク

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力であり、Cランクは軍を十二分に率いることができる。

騎乗：Bランク

乗り物を乗りこなす能力であり、魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなすことができるが竜種は範囲外である。

軍略：Bランク

多人数戦闘における戦術的直感能力。

圏境：Bランク

気を用いて周囲の状況を感知し、自らの存在を隠蔽する技法。極めれば天地と合一し、姿を自然に透け込ませることができる。

陣地作成：Aランク

魔術師固有のスキル。

戦闘続行：Bランク

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能とする。曰く、泥水啜っても生き延びる。

対魔力：Cランク

第二節以下の詠唱による魔術を無効化し、大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。これは彼自身にあるモノではなく、彼の羽織っている黒のコートに施されている。

魔眼：Aランク

流動の魔眼

魔術：Aランク

魔術を修得していることを表し、Aランクは魔法使いのレベル。

以上上記のスキルは全て、サーヴァントに与えられるものだが、彼もまた似て非なる存在のため、該当するスキルを記す。

しかし、この該当する殆どのものは生前の彼の行いから来るものである。

所有宝具一覧

絶世の名剣^{デュランタル}：A＋ランク

黄金の柄の中には、聖ピエール（聖ペテロ）の歯、聖バジル（バシリウス）の血、パリ市の守護聖人である聖ドニ（ディオニシウス）の毛髪、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められているため、アンデットや吸血鬼、悪魔などの属性が『悪』の者に対しての概念武装ともなる。

また、”折れない剣”という概念の具現化により、いかなる手段によっても破壊されない。

熾天覆う《ロー・》七つの円環^{ファイアス}：B＋ランク

青銅の盾になめした牛皮を七枚敷き詰めた盾で、やはりトロイア戦争の英雄ヘクトールの投槍をただ一つ防いだことから、それ以後宝具に昇華した時には七つの花卉を展開し防御する。

投擲系統の武器：手から離れて攻撃されるものに対して絶対の防御を誇る。

赤原猟犬^{フルンディング}：Bランク

決して持ち主を裏切ることなく、刀剣は血をすすることに硬くなつていく。

敵を自動で感知し、追尾する機能を備えた宝具。

ベーオウルフの攻撃を相手が回避しても、自動的に軌道が修正され

るため、ほぼ確実に命中する。
投擲した場合にも同様の効果を発揮し、元は弓を用いて剣としてだけではなく、矢としても用いる。

宝具の射出にも耐えられる洋弓：Dランク

本来、宝具を投擲するさいは弓に絶大な負担がかかるため、並みの弓ではもたない。

しかし、これは元が宝具の投擲にも耐えられるように骨子をより強度にしたものである。

丈夫であることを除けば、神秘性は殆ど無い。

破戒すべき《ルール》全ての符ブレイカー：Cランク

『裏切りの魔女』の神性を具現化させた至高の対魔術兵装である。刃としての切れ味は少し良い程度だが、ありとあらゆる魔術・魔力を無効化し、呪いや契約を破戒できる。

干将・莫耶かんしょうば：Cランク

持ち主のステータスをアップする効果を持つほか、双剣が離れている場合でも互いを引き合うという性質を持っている。

しかし、それを除けば投影における魔力効率のいい双剣であること以外、特徴は無い。

だが、人の鍛えし宝具としては最高ランクに位置する。（それでもCランク）

煉獄刀レンゴクトウ・紅蓮ケレン：・・・ランク（B・ランク相当）

再世者である付喪海から受け取った異界における鬼神の一振り。

真紅の刀身が指し示すは圧倒的な破壊である。
血肉を吸えば吸うほど、その切れ味は鋭くなり刀身は赤く染まっ
ていく。

本刀剣は再世者から受け取ったものであり、世界からの制限は元にかからないため、彼の固有武装となっている。

上記のレンゴクトウ・グレンを除けば、破損・欠損すれば新たに投
影（創造）することが出来る。

普段はレンゴクトウ・グレンを除いて、手元には無い。
必要となれば順次、創造、破棄を繰り返す。

名前：メデューサ

肉体年齢：24歳

身長：172cm

体重：57kg

スリーサイズ：B88・W56・H84（cm）

特技：乗馬 軽業 ストーカー

趣味：読書 お酒

属性：混沌・善

魔眼：石化の魔眼キュベレイ

桜に召喚されて、令呪によって慎二と仮契約した騎兵の英霊。その後、セイバーに敗れた際、神堂元に令呪ごと譲渡される。

女性の英霊で、ライダーの名の通り高い騎乗能力と機動力を持ち、豊富かつ強力な宝具を用いる。

常に魔眼を封じるための目隠しを装着しているが、後に近衛の遺産である魔眼封じの眼鏡を受け取る。

武器は鎖の付いた鉄杭を用いた機動性を生かした変則的な戦いを得意とする。

長身で女神にも例えられる妖艶な美貌と、それに似つかわしくない奥ゆかしく丁寧な性格（元曰く「可愛らしい」）で近寄りたいたいものはない。

元が愛した数少ない女性の1人であり、彼女もまた彼に対して感謝の念と好意を持っている。

（元が愛した女性の他にはアルトリア、蒼崎青子がいる）

生前は、女神アテーナーも嫉妬するほどの美貌と美しい髪を持つために怒りを買ひ、形なき島に姉のステンノ、エウリュアレ共々追放された。

しかし、それでも英雄達による討伐はやむことは無く、姉達を守るために彼らを殺し続けた。

血を吸い続けたことで崩壊し、最後は魔物『ゴルゴン』と成り果て最後はペルセウスによって討伐されてしまった。

誰もが羨む美貌とは裏腹に彼女にとっての美しさの基準は『小さくて可愛らしい』であるため、自分の容姿はあまり、好ましくは無い。なお、求愛されていた海の神ポセイドンは鬱陶しく思っていたようだ。

身体スペック

間桐桜：筋力B 耐久D 敏捷A 魔力B 幸運E 宝具A+（比較）

神堂元：筋力B 耐久C 敏捷A 魔力B+ 幸運D 宝具A+

所有スキル一覧

魔眼：A＋ランク

最高レベルの魔眼・キュベレイを保有。対魔力が低い者はほぼ無条件で石化されてしまう。

高い魔力を持つものでも、全能力値がワンランク低下する“重圧”をかけられてしまう。

単独行動：Cランク

マスター（元）からの魔力が絶たれても現界していられる能力でランクCにおいては、1日程度存在し行動可能。

怪力：Bランク

一時的に筋力を増幅させる、魔物・魔獣が保有する能力で発動中は筋力をワンランク上昇させる。

神性：Eランク

ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。

魔物としてのランクが上がったことでここまで退化してしまっている。

対魔力：Bランク

発動における詠唱が三節以下の魔術を無効化する。大魔術・儀礼呪法を用いても傷つけることは難しい。魔力を用いた攻撃には圧倒的である。

騎乗：A＋ランク

騎乗の才能。獣であれば幻想種（聖獣・神獣）すら乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。

ブラッドフォート アンドロメダ
他者封印・鮮血神殿：Bランク

結界内部に入った人間を融解し、血液の形で魔力へと還元して、使用者が吸収する。

形はドーム状をしており、端から見れば巨大な眼球に取り込まれたように見える。ただし、結界外からは敵に察知されないために、そのようには見えないようになっていた。土地の霊脈を傷つけるため、同一の場所に連続して施すのは不向き。

魔力の供給として用いるが、魔力のある人間であれば体調不良程度でとどまるため、魔術師、魔法使いには効果がない。

ブレーカー
自己封印・暗黒神殿：Cランク

対象に絶望と歓喜の混ざった悪夢を見せ、その力が外界へ出て行くことを封じる結界。普段はライダーのバイザーとして使用されており、自身のキュベレイを封じている。

だが、元から魔眼封じの眼鏡を受け取った後は使用する機会は殆ど無い。

当然ながら、自身以外にも使用できるため、この宝具の見せる夢を媒介に、ライダーは対象の人間から吸精することも可能。（淫夢）

ベルレフオーン
騎英の手綱：A+ランク

あらゆる乗り物を御する黄金の鞭と手綱。

幻想種であっても、この宝具でいうことを聞かせられるようになる。また、乗ったものの能力を向上させる効果もある。

主に召喚したペガサスに使用し、真名開放すれば、限界を取っ払っ

て時速400～500kmという猛スピードで相手に向かって呐喊する。

その威力は城壁が衝突するに等しく、エクスカリバーにも匹敵する威力を持つ。

第一話 I c a n ' t f l y !

本日は晴天なのだろう、雲ひとつない空に映し出されるのは瞬く星々が美しく輝いている。

隣には、男は彼が愛した女性メドゥーサが共に風を切っている。

「なあ、メドゥーサ」

「なんですか？ 元…」

「星が綺麗だな」

「ロマンチックなことを言いますね…本当にあなたは変わりましたね」

「…こんな俺は嫌いか？」

小さく彼女は笑う。

その仕草の一つ一つが美しく、愛らしく、愛おしく感じた。

恐らく、同姓である女性ですらその仕草には見惚れるだろう。

「いいえ…好ましく思えますよ。初めて会ったときからも前に会

った時よりも好ましく思います」

好ましく思うか…こいつらしい言い方だと思う。

でも、そこに惹かれたのかも…。

「それにしても…」

「…ん？」

「いつまで落ちるのでしょーうね」

風を切りながらの落下。

世界の外れから落とされた先は空の遙か上空であった。

だからだろうか、いつもよりも星が綺麗に見える。

「…地面に衝くまでじゃないか？」

「私はともかく、元は死にますよね？」

「……確実に」

上空5000mからのパラシュートなしでのスカイダイビング中なのだ。

…ああ、風が痛い。

「季節は3月くらいか」

「場所は麻帆良と言いましたか？」

「イシュタルからの情報はそうだったな、このまま落ちれば間違いなく麻帆良学園という敷地内に着くだろう」

地上まで500mを切ったところでも彼らの心持は全く変わらない。その胆力は英霊であるメドゥーサはともかく…人間となら変わらない元がこつも落ち着いていられるのは、納得がいかないものがある。

彼は自分はいくまで人間だと言い切るだろうが、この時点で人をやめているだろう。

「…うん？ 地面が見えてきたな」

「そうですね、それでどうするんです？」

彼はその疑問に彼女を抱きかかえるように…所謂、お姫様抱っこの状態である。

「元？」

「少し我慢してくれ」

彼女に微笑みながらそういう彼の周りの大気は激しく渦巻く、それは五大元素のうちの『空』と『風』である。

地面までは50mである。

その場所から、彼らは静かに地面に降り立つ。

「…死ななかつただろ？」

「ふふ…そうですね」

男と女その会話内容はともかく、その空気は惚気ているカップルのものである。

だが、その微笑ましい？光景を壊すものがある。

「なあ、兄ちゃん姉ちゃんよ」

「「ん(はい?)?」「」

「こんなところで惚気んなよ」

周りを見渡せば、そこには化生の類がうじゃうじゃしていた。烏頭や関西弁を話す鬼が20を超えていた。

「…全く、イシユタルも面倒な時に送ってくれた」

「女性の嫉妬は怖い…ということですよ」

「…フツ、メドゥーサが言っていると説得力があるな」

「ふふ…経験談ですよ」

まるで、こちらを異物でも視るようにしている化生の類。それもそうだろう、彼らの登場のしかた、そしてこの態度は”普通ではない”のだ。

「一つ聞きたい。 その鬼」

「なんや?」

「ここは麻帆良であっているな?」

「そつや」

「それで、お前らは敵か…?」

その答えに彼らは歪な笑みで返した。

鬼の笑顔など視たくも無いというのが彼の正直な答えだった。

「わて等は召喚されただけや、まあ主の目的からみたら…麻帆良の敵やろうな」

「そうか…メドゥーサ」

「わかりました」

「……!?!?」「」「」

彼らを包んでいた化生たちは目を疑った。

今まで獲物だと思っていた、目の前の男女の空気が一転して変わったのだ。

その空気は普通の人間からは発せられない殺気であった。

「くっ（なんや、こいつら!?!）」

いや、もはやここまでくれば覇気に近いだろう。

「悪いが消える」

「いきます…!?!」

彼らの生はそこで終わった。

あいつらはなんだ？

一人は黒のパンツに黒のシャツ、黒のコートに真っ黒な髪と肌を除けば全身が黒だった。

それを除けば、普通の人間に見える。だが、もう1人のでかい女はなんだ…。

「茶々丸…あれはなんだ」

「分析の結果から、魔力と測定不能の物質で形成している人の形をした何かです」

人の形をした何か…だと？

そもそも私達がここにいるのは侵入者を迎撃に出るためだった。今までと同じ、雑魚どもだと思った。

爺からの知らせにうんざりしながら茶々丸と向かった。

予想通り、いたのは数は多いがいつもの鬼や烏頭に狐女のいつもの面子であった。

しかし、その中心にいたのはいつもとは違う見たことも無い男と女だった。

「あいつらも敵か？」

「敵かは分かりませんが、どうやらアノ人たちは彼らの敵のようです」

あいつらも侵入者には変わりはない。

金髪の少女は元とメドゥーサを侵入した際に鉢合わせしたと思ったのだろう。

現にその通りなのだが、目的はまるっきり違った。

「マスター、戦闘に入るようです」

20対2…その戦力比から見ても彼らの負けは目に見えていた。だから、彼女はマスターと呼ぶ少女に戦闘が終わるまで待機を命じた。

少し手でも雑魚共を減らして、くたばってくれることを望んだ。

だが、現実は違った…。

「…なんだ、これは」

…一方的な殺戮でできた。

なんだ、この光景は…。
少し怪しくはあったが目の前にいた男女はただの人間のはずだ…なのに。

「強化をかける必要も無い…！」

「元…生き生きしてますね」

男の持つ深紅の刀は血を吸うごとに喜びの咆哮を上げるかのごとく、次々に仲間達を切り捨てていく。

刀身の長さからか、その円はそれほど大きくは無い。
振るわれる刃の軌跡は大きくはないが綺麗な紅の円を描いていた。

その円はつまりは刃の届く長さでもある。

円が無骨な首を通り過ぎる。

その刹那、首は綺麗にずれ落ちた。

斬られた側としてはいつ斬られたかもわからないだろう。

混戦の中、元の後ろから大きな一撃が入ろうとしている。

しかし、その一撃は決して届くことなく、メドゥーサの鉄杭に阻まれ、身体をそのまま貫かれる。

何という光景だろうか。

混戦の中、彼らには傷ひとつ無く、対して化生の数は一つまた一つと減っていく。

最初こそ、20いた存在は今では5つにまで減っている。

「…お前は何なんだ」

「うん？ 人間だが？」

男は息一つ乱すことなく、簡単に返した。

だが、その答えに誰が信じられようか…。

少なくともこの光景を見ているものには信じられるはずにはなかった。

「元は人間かもしれませんが、私は人間ではありませんよ」

「そういう考えならば、俺も人ではないだろ？」

「ふふ、そうかもしれませんがね」

馬鹿にしている。

今の今まで殺し合いを繰り返して来た者たちの会話とは思えないまでの和やかな声色だった。

息も感情も乱すことなく、ここまでの光景を作りあげていた。

「貴様等…ふざけているのか！」

「まさかな…。ただ、拍子抜けしただけさ…化生の存在ゆえに少しでも楽しめるかと思っただが…存外そうでもなかった」

「簡単に済むのなら、それでもいいのでは？」

「…まあ、そうなんだがな…こいつがさ」

舐められている。

残ったのは5体…20でも敵わなかったものが5で敵うはずもない。しかし、このままで済ませたくはなかった。

「……………」

「まあ、舐められっぱなしってのもなあ…」

「いつちょ…やるか？」

「舐めんなよ…」

「殺す…！」

先ほどまでに無い、殺気が化生から流れ出る。

それもそうだろう…ここまで人間に舐められて黙っていられるほど彼らは腐ってはいなかった。

「いい殺気だ…それでこそ殺す価値がある。…「こちらを殺す気もないくせに本気でやってもらおうなどと思つなよ？ 化生共…！」

「やっつてやらあ…！」

「」「」「うらあああ…！」」「」「」

「来い…！」

いわば、彼のやっていた事は挑発だったのだ。
彼らの本気を引き出すための…。

「…はあ」

彼の性分を理解している彼女も溜息を洩らす。
呆れているのか、見放しての溜息なのかは分からない。
しかし、それはどちらでもない。

「（…まあ、元はこうでなくては）」

本当に彼女は彼のことを理解している。

金髪の少女は言葉を失った。

正体不明の女も男もここまでとは思わなかった。

端から見てもわかる…奴等は戦いなれすぎている。

年齢は20代半ばに見える…だが、その年齢とは不釣り合いすぎるまでの戦いようだ。

恐ろしかった。

戦いぶりも、何もかもが。

しかも、男は魔力も気も纏わせることなく戦っている。

異常すぎる…剣技は確かに目を張るものがある。

葛葉や桜咲よりは腕は上だろう…だが、圧倒的に上ではない。

なのに、何故こうも圧倒的なまでに戦えるのか…。

「茶々丸」

「彼の反応スピードは確かに高いです、剣速も葛葉様や桜咲様よりも上でしょう…しかし、目に張るものはそこではありません」

「戦術幅か？」

「はい。…ですが、驚くべきところはそこではありません」

「どういうことだ？」

「逐一変わる戦いの場でその場に最も適した戦術を的確に最速で選択しているのです」

茶々丸に言われて、男の動きを見てみる。

…確かに、言われてみればそうだ。

動きが逐一変わるのだ。

奴等を斬ったと思えば、その瞬間で動きの色が全く変わるのだ。

その戦い方はまるで同一人物のソレとは思わない。

一体どれだけの戦術をもつて、体得しているのだろうか。

剣を使ったかと思えば、体術で相手を絡めとり動きを拘束し、首の骨をはずし命を奪い取る。

恐ろしい。

この身は魔力を封じられている。

このまま男との戦闘に入れば、間違いなく破れるだろう。

…だが、封印がとければ男に勝てるのか？

圧倒的な魔法で敵を粉碎し、叩き落とす。

それが、アノ男に通じるのか？

「…ッ！」

私としたことが…闇の福音、不死の魔法使いと恐れられた私が恐れられているだ！

ありえない…だが、勝てるイメージが浮かばない……。

必死に頭をふり嫌なイメージを拭い去ろうとする少女とは裏腹に隣にいる少女は彼らの戦闘データを冷静にとっている。

「マスター」

「ツな、なんだ」

不意に呼ばれ、声が上がってしまった。

なんと情けないことか…。

悪象徴として恐れられた彼女は今では唯の少女に成り下がっていた。

だが、そんな彼女の気持ちとは裏腹に茶々丸と呼ばれていた彼女は冷静に彼らの異常性を告げる。

「男性の方は確かに恐ろしいですが、私には女性の方のほうが異常に思えるのです」

…：どうということだ？

確かに、女は人間とは思えない。

しかし、ソレほどまでに脅威とは思えない。

「彼女の俊敏性が異常なのです…：魔力による強化も気による強化も見受けられないのです」

「…：確かにな。だが、あの女は人間ではないのだから人と同一ではないだろう」

「そうではないのです」

「？」

「人間の形をしている以上、動きに限界はあります…。しかし、あの方のソレはその限界を大きく超えているのです」

「…なんだと？」

「仮に人間の女性ならば、筋力、反応スピード、俊敏性、あらゆる面が規格外なのです」

言われて、女の動きに注目してみる。

今まで男のほうに注目していたせいもあり、女のほうの異常性に気づけなかったのだ。

…なんだ、あの女は。

重力を感じさせない動き、瞬発力…確かに異常だ。

男の異常性はその戦い方。

しかし、女の異常性はその動きだ。

目の前に迫った凶刃を何事も無いように避ける。

言葉にすれば、可笑しくも無いことなのだが、目にしたものだけが分かる。

混戦の中、高速で動く得物を綺麗に避けていく。

言葉には出来ない。

言葉には出来ないのだ。

出来るはずが無い。

もし、できるのならば、その人間は表現力豊かな…そう芥川賞ですら簡単に得られるだろう。

「茶々丸…」

「はい」

「タカミチや他の魔法先生共を呼んでおけ…こいつは私達の手には
負えん」

茶々丸は静かに頷き、増援の連絡をとる。

この瞬間に闇の福音…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの
負けは確定したのだ。

一人人として、彼女は自分の負けを認めた…。

第二話 麻帆良との出会い

「あい、わかった…すぐに向かわせよう」

部屋に静かに響いた電話の会話音は静かに終わった。

それは麻帆良学園の長…学園最強の魔法使いであり、関東魔法協会の理事も務めるご老体である。

その姿からは見えない力をその身に宿しているのだ。

「(まさか、エヴァから増援の要請があるとはのお…)」

最初その通信を聞いた時は我が耳を疑った。

ワシの知るエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという少女は真祖と呼ばれる600年を生きた最強の吸血鬼であり、最強の魔法使いを自称するほどの使い手である。

性格も自らの負けを大人しく認めるほど大人しいものではなく、どちらかというと唯我独尊を地でいくようなものなのだ。

それが、戦いもせずに増援を求める…。

「恐ろしいのお…」

彼は再び電話に手を伸ばし、魔法先生たちと一部の魔法生徒に連絡をとる。

相手のほうもまさか、増援を求められるとは思ってもしなかったよ
うで、声に揺れが見えた。

「それでは高畑先生…頼みますぞ」

静かに受話器をおいて、溜息を吐く…。

「まさかネギくんが来て一月でこうも厄介なことに巻き込まれるとはのお…、いや、ネギくんが目的かの？」

彼の心労は淡々と募っていく。

「メドウーサ…怪我はなかったか？」

「はい。元もお怪我はありませんか？」

「フツ…この程度で怪我を負うほど軟な鍛え方はしてないよ。…
そこの二人出てきたらどうだ？」

「「!?!」」

まさか、気づかれていたのか!

こちらは完全に気配を消していたはずだ。

確かに、認識遮断の魔法は施してはいなかった。

だが、こうまで簡単に見破られるとは思わなかった。

俺達から少し離れたところにある林の中から二人の少女が出てきた。

1人は10歳、もう1人は15、6歳か?

どちらにしても、両人とも人間ではあるまい。

しかも、片方は…、

「そちらの少女は吸血鬼か…?」

「そうだ」

あくまで気丈でいなくてはいけない。

増援の少なくともタカミチたちが来るまでは、時間をかせがねば…。

…いや、なにより私ともあるう存在がこうも後ろ向きな考えをしなくてはいけないのが腹が立つ。

「私が闇の福音と恐れられる真祖の吸血鬼だ!」

私の口上に呆気にとられるように二人は呆けている。

なんだ? 私は可笑しなことを言ったか?

「真祖…? 貴様がか?」

「そうだ、何か文句があるのか」

「…メドゥーサ、真祖に見えるか？」

…なんだと？

「全く見えませんね」

…イラッ。

この女…少し背が高く胸がでかいからって…。

「まあ世界が変われば、真祖の定義も変わるか…」

「そうですね…。それに真祖がこんなに可愛らしいはずがないです
し」

「ほお…」

ダメだ…殺そう。

「マスター…」

「貴様等…」

「…なんだ？（なんです？）」「」

「死ねええ！！」

こうして、最強の魔法使いと調整者、英霊の戦いが始まった。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

ディレイ・スベル
遅延呪文という技巧を遣い、詠唱を完了させた魔法を待機させる。

「茶々丸！」

「ロケットパンチ」

「なっ!?!」

男は両腕の前腕部の有線式の射出パンチ…所謂ロケットパンチに驚

いているようだ。

確かに何も知らない人間がこれを目にすれば、驚きもするだろう。

しかし、男の驚きは一瞬で終わり、放たれたパンチは彼が蹴り上げることで防がれる。

だが、それが隙になる。

「魔法の矢29!」

魔力によって攻勢された29本の矢が放たれる。

しかし、それは彼に届くことはなかった。

---ロー・アイアス---

それは7枚の花弁のごとき盾によって完全に防がれていた。
魔法の矢とはいえ、それは投擲である。

つまりはこの盾には無意味なのだ。

投擲でこの盾を破るのであれば、それこそゲイ・ボルグ並みの神秘
を用いなければ、不可能である。

「クソ…!」

「フツ…」

何なんだ、あの盾は!

エヴァンジュリンは訳がわからなかった。

何も無い空間から、急に盾が現われたのだ。

「(アーティファクトか?)」

「思考に陥っている場合か？」

「ッ!？」

彼女は寸でのところで身体をそらせる、慣性の法則に従い、その場に残った僅かな前髪は斬り散らばった。

だが、それで追撃の手をやめるほど元は甘くは無い。
前動作の無い剣筋は彼女の命を刈り取るうとしている。

「マスター!」

「チイツ!」

しかし、それは男と女の間に入った光の筋によって阻まれた。
どうやら、眼球部からのレーザー光線なのだろう。

「ロケットパンチに光学兵器…まるでアニメだな。大した科学力だ」

「お褒めに預かり光栄です」

「それに礼儀作法もシツカリしている…短気な主に比べて有能だな」

「チツ…良く喋る口だ! リク・ラク・ラ・ラック・ラ「私を忘れてませんか?」ぬう!？」

魔法の作動キーなのだろう…彼女の呪文は最後まで紡がれること無く、メドゥーサの鉄杭に妨げられる。

当たりこそしなかったものの、彼女達は追い込まれていた。

負傷はしていない。
だが、追い込まれている。

「（タカミチ達はなにをしている！）」

彼女は憤っていた。

増援が遅いのだ。

しかし、彼女が増援を要求してから5分も経っていない。

張り詰められた空間が時間を歪めているのかと思うほどに時間の流れが遅く感じた。

「マスター……」

「茶々丸、情けない声を出すな」

「……これではまるで苛めているみたいですね」

「はあ……全くだ」

情けなかった。

ここまで追い込まれても相手は本気のほの時も出していない。

対して、こちらは息も絶え絶えだ。

ここまでくれば、怒りもなく、すっきりもせず、情けなかった。

「クウ……」

強く拳を握る。

私はこんなにも弱かったのか。

闇の福音とまで恐れられた私はこんなわけも分からん奴等に負ける

のか…。

その光景に元は溜息をはいて、深紅の刀身を鞘に戻した。

「…え？」

「どういつつもりで？」

「そちらの戦意はなくなったと判断したまでだ。ならば、こちらが剣を持つ必要はあるまい」

「どこまで…どこまで私等を馬鹿にすれば気が済む！！」

いつそのこと殺してくれたほうがマシにも思えた。

しかし、この身は不死の身。
並大抵のことでは死ぬことは無い。

「馬鹿にはしれないさ…俺らには元々戦う気はないのだからな」

「それはどういう「エヴァ！」「タカミチ！」

そこに、ようやく増援が来た。

「エヴァ、無事かい！？」

「あ、ああ…」

エヴァと呼ばれる少女と茶々丸と呼ばれる少女は一気にこちらとの距離をとり、タカミチと呼ばれていた増援達と合流した。

「絡繰さんも無事ですか？」

「桜咲さま…ご心配かけました」

恐らくは魔法使いの増援…中には中学生くらいの背丈の少女も何人かいる。

なるほど…俺達がいた世界よりは神秘に対する姿勢が緩いのか…。

「さて、僕の元生徒がお世話になったようだね」

「（この男…タカミチといったか。デキルな…）」

「高畑先生…」

「分かっています、ガンドルフィーニ先生…。それじゃあ、侵入者の二人…準備はいいかい？」

「タカミチ…気をつける。あいつ等2人とはいえ、かなりやるぞ」

彼らは杖を取り出し、魔法の始動キーを唱える…。

いつ、第二ラウンドの戦闘が始まるうとしていたが…、

「…元」

「分かっている」

彼らは短いやり取りで、一つの答えを導き出した。

それはなんとも呆気ないものであった。

その姿は両手を挙げての…。

「降参だ(です)」

「はい？」

戦いは呆気なく、格好悪く終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7646x/>

ネギま！advance

2011年10月21日04時16分発行